ムードの形式と意味(1)

——概言的報道の表現——

寺 村 秀 夫

1. は じ め に

本稿の直接の目的は、現代日本語で、ダロウ、マイ、ソウダ、ヨウダ、ラシイおよびそれらに類する語の使い分けが、どのような素因の複合として説明できるかを考えてみることである。

従来の一般の国文法書では、これらの語は、品詞論の枠の中で、「推量の助動詞」「伝聞の助動詞」等々として、個別的に、接続・活用・意義・用法が説かれるのが普通になっている。が、このような取扱いには、第一に構文論的な視点が、第二にこのような構文要素のもっている複雑な意味の性格を考え、それを記述する原理を見出していこうとする姿勢が欠けていた。

第一の点、つまりこの種の助動詞を日本語の文構成の全体の中で性格づけなければならないという点は、しかし、既にしばしば指摘され、国語学では主として「陳述」論議の展開と並行して、そしてまた近年の生成変形文法の側からは「上位の文」あるいは「補文構造」を仮設する考え方の適用が試みられて、次第に精密な分析が提案されるようになってきた。しかし、第二の点、すなわち、そのように構文論の中で位置づけられたこれらの助動詞の意味的・機能的特性を客観的・統一的に記述するには どうすればよいか という点については、いまだ充分に詳細な議論が交されていないように思われる。上記の助動詞についての観察をはじめるに先立って、ここで上の2点についてのこれまでの論を、ごく簡単にふりかえっておきたい。

文が、事柄の客観的な描写・叙述を表わす部分と、それに対する話し手の主観・主体的態度を表わす部分とから成ると考えることは、洋の東西を問わず古くから行なわれてきたことである。バイイの‘dictum’対‘modus’，近くはフィルモアの‘modality’対‘proposition’などはとくにわが国でも既に親しまれている概念だが、国語学では、伝統的な「詞」と「テニヲハ」という対

立概念を、時枝誠記が、「概念過程」を含む形式＝「詞」、含まない形式＝「辞」と規定しなおし、日本語の構文の特質を、詞を辞が「入れ子型」に包んで文末で統一されるところにあると説いた、そのことと、山田孝雄の、文を統一する力を用言の「陳述」作用にあるとしたこととが、いわば合流して、その後の長い陳述論争の契機となった。その跡づけには、たとえば大久保忠利『日本文法陳述論』(1968) のような一巻の書物を必要とするぐらいで、主な論点をたどるだけでも本稿の手にあまる。そこで、ここでは、渡辺実『国語構文論』(1971) をその長い論争の一つの結晶と見、その「叙述」「陳述」を柱とする構文論の体系の中で、本稿の助動詞がどのように位置づけられ性格づけられるかを概略見ておくことにしたい。

渡辺氏は、たとえば「花が咲く」というような文は、「花」「咲ク」という素材概念が、「(花) が」という主格関係概念を表わす「展叙」と、「咲ク」という用語が (どのような活用形をとるかに関わりなく) もつ綜合作用による「統叙」によって結びつき、この二種の叙述によってまず「花が咲く」というまとまった「叙述内容」がととのえられ、その叙述内容を素材として話し手が (この場合は)「断定」という一つの「陳述」を加えて成立したものである、と考える。つまり、陳述とは、叙述内容に対して、「言語主体が、その素材、あるいは対象・聞手と自分自身との間に、何らかの関係を構成する関係構成的職能である。」そして、「陳述の職能を託される内面的意義」として渡辺氏は「断定・疑問・感動・訴え・呼びかけ」の五種を認める。

さてこのような構文のモデルの中で、推量などの助動詞は、どのように位置づけられ性格づけられるか。氏は「いわゆる助動詞、厳密に言えば助動詞が担う否定とか推量とかの意義に託される構文的職能は、統叙と陳述との中間的な性格を有し、これらの助動詞を介する時、統叙と陳述とが一旦は明確に異質なものとして区別されねばならない反面、結局は連続する関係にあるものであることが、線条的な姿で明確に浮かび上がって来る」(112 ペ) とし、助動詞を、直接体言に下接するか否かで甲、乙の二種に、そして統叙成分に近いか陳述成分に近いかで3類に分類する。そして、第1類 (サセル、ラレル、タイ、[シ] ソウダ、ダ) は統叙の一種として、第2類 (ラシイ、ナイ、タ) は、「一旦は統叙の外ではたらきながら、結局は統叙の一種にすぎず、このような二重性格があるという意味で統叙の延長として」はたらき、第3類 (マイ、ウ、ヨウ、ダロウ) は「終助詞に準じて、陳述の一種としてはたらく」(123 ペ) と性格づける。

動詞・形容詞の活用形、助動詞、終助詞などのうち、どれが「主観的・主体

的」表現で、どれが「客観的・客体的」表現か、という議論の中で、「主観的」ということを最も狭く「話者のその時の心理を主観的に表現する」ものと限定する金田一春彦「不変化助動詞の本質」(1953) は、「終止形だけしかない」助動詞、ウ、ヨウ、マイ、ダロウ、それに回想や命令も表わす特殊なタ (チョット待ッタ)、間投助詞的な特殊なダ (ソコデダ...) の類だけが、終助詞と同じく真に「主観的表現」と特徴づけるべきもので、いろいろの活用形をもつ助動詞は、動詞・形容詞と同じく、「諸種の事実・事態を客観的に表現するのに用いられる」ものだとする。この「主観的」表現の助動詞は、渡辺(1971)の「陳述の一種としてはたらく」助動詞と重なる。両者の基本的な考え方にも共通するところが見られる。

文の構造を考える上で、話し手の主観を表わす部分、ないし話し手ということに言及せずにその用法が説明できないような部分の果す役割を考えることが重要な課題となることは、何語の文法においても普遍的なことであると考えられるが、一方で上のような国語学における助動詞についての議論をふまえ、また一方で英語の、主として生成文法家による助動詞に関わる研究をとり入れつつ、この問題を普遍的な構文の問題として論じた力作に、沢田治美「日英語主観的助動詞の構文論的考察」(1975) がある。沢田氏は特に Ross (1970) のいわゆる 'Performative 分析' (Austin (1962) の 'Performative sentence'——発言そのものがある行為の行使であるような文——の考察にヒントを得たもの) と、梶田優 (1968) の、主として助動詞と副詞との共起関係などから文の中に組み込まれる文の重層性を記述した研究を土台とし、上記の渡辺、金田一、それに芳賀 (1954) などをそれらに対置させ、日英両語ともに、文が「伝達 (Performative)」「述定 (Epistemic)」「叙述 (Propositional)」の三層から成ると考えるべきことを論じている。その日本語の助動詞の、主観か客観かという観点からの分類は、ほぼ渡辺、金田一両氏の分類に等しい。

ある語類の意味的、機能的特質を与えるのに、それが否定になるか、過去形をとるか、またそれを使って疑問文が作れるか、といったことが——共起する副詞の種類などとともに——重要な手がかりとなるのは普遍的なことといってよいだろう。先の国語学での議論のように、「終止形だけしかない」とか「活用しない」とかいうようにいうと、それはある言語に限られるようなことになるが、否定化の可能性、あるいはテンス性があるか否か、疑問文が作れるかといえば、他の言語にも適用できるテストとなる。この点について日英語を比較し、命題 (proposition——ここでいう叙述内容) とモダリティについての考察

をしたものに中右実(1979)がある。そこには、いわゆる modal の助動詞以外に、sure, think, likely などについての Quirk その他の観察が紹介され、日本語の「思ウ」「ハズダ」などとの対比が、命題とモダリティとの関わりにおいて吟味されていて興味深い。なお寺村(1979)は、特に否定辞の性格を文のこの二つの成分との関係に焦点を当てて考えたものである。

以上、本稿の対象となる助動詞が、構文論の中で従来どのように位置づけられ、性格づけられてきたかをかいつまんでふり返ったわけであるが、ここで一応諸家の助動詞の性格づけについての違うところを調整し、本稿なりにこれらの助動詞の位置づけを素描しておきたい。

まず、渡辺、金田一両氏ともに助動詞の中に入れておられるウ、ヨウは、ここでは活用語尾と考える。タも同様である。そして活用形は一般に話し手の主観的態度の表現である、つまり形容詞や動詞は、その語幹部分が客観的表現、活用語尾が主観的表現という二つの成分をあわせもつものだとする考え方にくみする。両氏ともに伝聞のソウダ、「様態」のヨウダは形式体言とダの結合として，助動詞の観察から外している(ただし金田一氏はヨウダはラシイと性質が同じだと説明はされている)が、本稿では、これらを、ダロウ、ラシイと同じく「陳述の」あるいは「ムードの」助動詞という構文要素類に入れて観察の対象とする。その典型的な構文的特徴を、動詞・形容詞の現在形(＝終止形)にも過去形にもつく点に求める。その規準でいくと、他に、ハズダ、ワケダ、モノダ、ノダ等も入ってくることになる。ただ、「様態」のソウダと推量・意志のマイは、その前に来る形が限定されているが、意味・機能の上での共通性からこの類に入れる。

文を客観的な「叙述内容」(以下単に「コト」とも呼ぶ)と、話し手の主観的・主体的態度を表わす部分(以下「ムード」と呼ぶ)から成ると考えることは、それぞれに違った記述の原理が求められるだろうという点からも、必要だと思う。ムードには、大きく分けて、コトに対する話し手の態度、把握の仕方を表わすものと、話し相手、およびコトの中に登場する人物に対する態度を表わすもの、つまりいわば「対事的」「対人的」の二種が認められる。対人的ムードは、さらに、相手に対して何らかの反応的行為を求める種類のもの(芳賀綏氏の「伝達的陳述」)と、単に人に対する敬意(プラスマイナス両方向の)を表わすものに分けられよう。前者は、典型的には終助詞によって表わされるものだが、ik-ô, ik-e などの活用にも現れる。後者はいわゆる丁寧・敬語の語法の問題である。

コトに関するムード（芳賀氏の「述定的陳述」）にはどんなものがあるか、それは本稿のような観察を積み重ねることによって次第に明らかになっていくべき、今後の目標である。それは、日本語でどの語類に託されるかというだけの問題に止まらず、表現意図の仕分けの問題になるだろう。いわゆる現象文や、Austin の Performative 文のように、述語が現在形(終止形) だからといってすべて「断定」の文だとは限らない。

本稿では、ダロウ、マイ、「様態」（または「推量」の、つまり動詞連用形、形容詞語幹に付く）ソウダ(以下、伝聞のソウダと区別して「(シ) ソウダ」と書く)、ヨウダ、ラシイ、ソウダ、それにそれらのバリエーションとして、カモシレナイ、ニチガイナイなどを、まとめてムードの助動詞のうち、「概言的に状況を報道する表現」の助動詞とする。ハズダ、ワケダ、モノダ、ノダなども、先に記したように、ムードの助動詞の一種と考えるが、これらは「状況を報道」するのでなく、事態を「説明する」ムードを表わすものと考える。ムードの種類だけでなく、それらが共起するときどういう重層になるか、また、日本語の場合、述語に後接する形式だけでなく、係助詞や副助詞の類も、「100人来タ」に対する「100人モ来タ」「100人ダケ来タ」「100人シカ来ナカッタ」「100人モ来ナカッタ」のように、コトの素材である名詞句に付いて話し手の、事態に対する見方を表わすものもやはりムードの表現と考えるが、それらが同じくムードと言ってもどう違い、その違いは形式的にどのように記述すべきであるか、といったようなことすべてが、今後の課題として解明を待っている。

この節のはじめに、本稿で扱おうとする助動詞についての伝統的、というより教科文法的説明に、構文的視点と、意味記述の原理を考えようとする視点が欠けていたと述べた。そのはじめの点については、上にごく簡単ながら紹介したように、少なからぬ学者によって研究が積み重ねられ、発展してきていることが分かった。問題は第二の点である。

ムードの記述というのは一般にどのような形式が適切なのかというような大きな問題は、個々のムードの下位類についての意味的特徴づけにどういう表現が使われるかということを吟味することから帰納されるべきものであろう。そしてまたそれは、同じムードの下位類を構成する形式が相互にどの点で共通し、どの点で他と区別され、使い分けられているかを仔細に見ていくことから始めなければならないだろう。同じく「統叙成分の一部として」、あるいは「統叙の延長として」はたらくといっても、それらが実際に話し手のどのような「断定作用」の違いで使い分けられるのかは、上に見て来たような、これらの

語類の共通の構文的・意味的特徴は何かという問題意識の（一応は）外にある。本稿は、たとえば、金田一氏が、《「...ト推定サレル状態ニアル」（マタハ属性ヲモッテイル）という意をもつ助動詞であって、客観的な叙述に用いられる語だ》とされた、（シ）ソウダ、ラシイ、ヨウダが、相互にどう違うのかということを考えようとするのである。

これらの助動詞の用法についての詳しい説明がこれまでになかったわけでは、むろん、ない。永野賢（1951）、吉田金彦（1971）はとくに包括的で詳細だし、渡辺実（1964）、風間力三（1964）また先の金田一（1953）にも個別的ながら具体的で、微妙な差異についての説明があり、教えられることが多い。しかし、それらを読んでいくと、しばしば、明確に定義されない「客観的な推量判断」とか「純粋に客観的な」とか「不確かな、円曲な断定」とか「対象に向かう話し手の主観性」とか「傾斜の状態」とかいった表現が、違った形式について同じように使われてあり、どれがその語に固有の特性で、どれが他の語と共有する特性かということがよく分からないことが多い。このことは、たとえばの話であるが、外国語として日本語を習得しようとする者の立場に立ってみるとよく分かる。どのような「詳しい」説明であっても、それが組識だった、客観的に明確なものでないと、それらの語の正しい使い分けの頼りにならないのである。これは、この種の記述の実用的目的のことを問題にしているのではない。たとえば塚原鉄雄「推量の助動詞」（1957）に見るような、上代の助動詞の用法の説明の明晰さと比べてみるとき、われわれはもっと、現代語の使い分けに働らく心理的・主観的要素を客観的に見、記述することに努めなければならないのではないかと考えるのである。

はじめに、本稿の「直接の目的は」と書いたのは、次節で試みるような推量助動詞の使い分けに関与する素因の観察を通して、ムードの構造的な記述に向かっての手掛かりを得たいというのが本稿のいわば遠い目標であるからである。このようなムードの表現の使い分けにおいてどういう素因が複合しているかということは、また、日本人の言葉遣いに、どういう心遣いが関与するのかを（一般的に）考えることにもつながるだろう。

2. 概言的報道表現の使い分けの要因

以下の記述では、前節にあげたような助動詞の使い分けに、話し手の、どのような「主体的」「主観的」態度が関与するかを、より大きな要因、つまり多く

の語に共通する要因から、より小さい要因、つまりより少ない語、最終的にはただ一つの語を他と区別するような要因へと順を追ってあげていくことにする。それら要因(一つ一つを「素因」と呼ぶ)は、大・小、あるいは上位・下位の関係で同時に働らくものもあるが、そうでなく同レベルの関係のものもある。その別に関係なく[　]で一貫番号をつける。ある素因、たとえば、〈判断の根拠は自分の観察に基づくものか否か〉というような素因について、純粋に正負の価だけが問題であるときもあれば、〈...他から得た情報に基づく〉というように反対概念を書き記すことが必要な場合もある。そこは適宜やっていく。そして最後にそれらの素因の複合と個々の語の対応を表にしてまとめる予定である。

まず、これらの助動詞による表現を、次の(1)(2)のような表現と大きく区別するものは何かというところから始めよう。

(1)　雨ガ降ッタ。
(2)　雨ガ降ッテイル。
(3)　雨ガ降ルダロウ。
(4)　雨ガ降ルカモシレナイ。
(5)　雨ガ降ルニチガイナイ。
(6)　雨ハ降ルマイ。
(7)　雨ガ降リソウダ。
(8)　雨ガ降ルヨウダ。
(9)　雨ガ降ッタヨウダ。
(10)　雨ガ降ルラシイ。
(11)　雨ガ降ッタラシイ。
(12)　雨ガ降ルソウダ。

上の文はすべて、話し手がある事態、状況についての情報を相手に伝達している、いわば「報道」の文であるということができる。その点で、命令、要求とか、意志・意向や感情の直接的表出などと区別されよう。本稿では、このような意図をもつ文を「報道のムード」の表現と考えることにする。

このようにある事態についての情報を相手に伝えようとするとき、その情報が、話し手の直接経験(典型的には自分の眼で見たこと)に基づく場合は、上の(1)、(2)のような「確言的('indicative')表現」(または単に「確言」)の形をとるだろう。しかし、ある事態についての情報が求められている場合(あるいは求められていると話し手が感じた場合)、話し手は直接経験した事実についての知識をもっているとは限らない。そのときは、いわば'次善の'策として、何らかの方法によって、相手が事態について知るための手がかりを与えよ

うとするだろう。(3)〜(12)は、このように、話し手が、事態を確実な事実としては知らないが、おおむねこうだと思われる、あるいはこうだと思わせるような情報がある、という表現である点が共通している。こういう表現を「概言的('presumptive')表現」(あるいは単に「概言」)と呼ぶことにする。従来の「推量」「様態」「伝聞」を含めた概念である。本稿の対象とするのは、「報道」のムードの文のうち、確言に対して「概言」を表わす表現、とくにその中心をなす助動詞ということになる。断わるまでもないが、直接経験に基づくとか基づかないとかいうのは、話し手が相手にそのようなものとして印象づけようとするということである。しかし、以下では、一々「...ということを相手に印象づけようとする話し手の心理」というようにいうことはしない。

「概言」的報道ということをわざわざいうのは、いわゆる「推量」と「伝聞」を共通のカテゴリーの下位概念としたいからだが、その理由の一つは、伝聞の「ソウダ」が、単に「他から伝え聞いたことを述べる」というだけでは説明できない文法的特性をもち、それが推量の表現と通ずるものと考えられるからである。その特性というのは、それが否定形にも過去形にもならず、また疑問の形もどこか不自然だと思われる点である。たとえば(12)に対して、

(13) 雨ガ降ルソウデハナイ (?)
(14) 雨ガ降ルソウダッタ (?)
(15) 雨ガ降ルソウカ (?)

は、いずれもあり得ないか、または非常に不自然であろう。先に金田一氏の「不変化助動詞」の論について少し触れたように、否定や過去形にならないのは、氏のあげられたダロウ、マイ、ウ、ヨウだけではない。

ついでながら、興味あることに、英語の同じような伝聞表現'They say...' 'I hear...' 'I understand...'なども、同じように否定にも過去にも疑問にもならない。(するともとの意味が変わる。)このことは前記寺村(1979)にも記したのでここではこれ以上立ち入らない。

概言的表現のうち、ダロウ、マイ、伝聞のソウダは、このように、否定にも過去にもならない。ソウダはさらに疑問にもならない。ヨウダ、ラシイは過去にはなるが、否定にはやはりならないと思う。(文法書の中に否定形にした作例を見かけるが私にはどれも自然にあり得る形とは思われない。)ヨウダは「比況」の使い方では、また「ラシイ」は「典型的な、ふさわしい」という意味では否定になるが、ここで問題にしているのは推量の用法である。結局、否定形にも過去形にも疑問の形にもなれるのは(シ)ソウダだけということになる。「確

言」的表現についてはまだ考えねばならぬことが多くあるけれども、少なくともその一つの型である、いわゆる「現象文」は、やはり否定にするとおかしい。たとえば、

(16)　ホラ、アノ木ノ上ニ鶯ガイル。
(17)　ア、雨ダ。

のような文を否定形にできるだろうか。現象文的表現を否定の形にすることができるのは、

(18)　ア、鶯ガイナイ。
(19)　時間ガナイ。

のように、肯定文が「常態」を表わしているという前提が話し手の頭の中にあるときだけであろう。

こうしてみると、確言的表現のうちの現象文的表現と、(シ) ソウダを除く概言的表現のすべてが、否定形のない、いいかえると、形は肯定形だが否定形に対するものとしての肯定形ではないという、特別の性格を(潜在的に)もっているということがわかる。しかしこれは、これらすべてを「報道」を旨とする表現であると考えれば当然のことだと理解されよう。試みに新聞の第一面をはじめから眺め、各文の終わりを「～ナイ」「～ナカッタ」という形にかえてみるとよい。全部とはいえないが、ほとんどが極めて奇妙な文になることがわかる。そして否定になる場合は、肯定の形で表わされる内容が読者によって予想・期待・危惧されていたような場合が多いことも明らかになるだろう。用言の現在形(終止形)、過去形で言い切りになる確言的表現がすべて報道の文であるとはいえないが、その形式をもつ文にこのような性格、ムードのものがあること、そしてその面で、従来「様態」「推量」「伝聞」と呼ばれてきた表現と共通する性質をもつことが知られる。

ここまでのところをまとめると、次のようになる。

事態についての情報を相手に伝えようとする意図に発する文(「報道の文」)には、まず次の二つの大きな種類があり、その使い分けの要因は次のようである。

[1] 〈話し手が直接経験して(典型的には自分の眼で見て)知り得たことか、否か〉

この素因について、プラスであれば、用言の現在形(終止形)か過去形で言い切る文になる。マイナスであれば、(3)～(12)の文末のような助動詞が使われる。

次に、(3)～(12) の概言的表現は、話し手がその概況を報道するにあたって、自分の知り得た事態から自分が推測していうのか、あるいは他から得た情報をそのまま相手に推測するための材料として提供するか、という点からまた大きく二つに分けられる。(3)～(11) は前者、(12) の「伝聞」が後者ということになる。つまり、概言的報道の表現をまず二分するのは次の素因である。

[2] 〈自分の推量による概言的報道か、他から得た情報の提供か〉

前者の場合は、ダロウ、カモシレナイ、ニチガイナイ、マイ、(シ) ソウダ、ヨウダ、ラシイとなる。(「推量の表現」)

後者の場合は、ソウダ、またはラシイとなる。(「伝聞の表現」)

(つまり、ラシイは両方の素性についてプラスである)

次の推量の表現に進むまえに、一つ考えておかねばならない要因がある。それは概言的報道の表現が、客観的に、というよりより正確には話し手の知らないところで、既に起こった事実についてのものであるか否かという点である。確言的表現についてと同様、未来、現在、過去のどの事実についても概言的表現が考えられよう。未来というのは未だ確定した事実とはいえないが、話し手がその事の実現についていささかの疑いももっていないときには確言的表現となる。「明日ハ土曜日ダ」「明朝ハ 5 時 30 分ニ日ガ出ル」のようなのは客観的に実現があたかも既定のごとく考えられる普通の場合だが、「今晩彼ガ来ル」というようなのも、話し手の心理としては同じだということになろう。いわゆる「習慣を表わす現在形」もそれと近いものと思われる。

概言的表現の形式のなかで、既定の事実について使うことのできないもの(つまり用言の過去形に後接できないもの)は、(シ)ソウダとマイである。これらによる表現は、現在または未来のことに限られる。その他の (本稿の) 形式は、現在・未来についても、過去についても使われる。このことを表わすために [3] に加えて [4] も挙げておこう。

[3] 〈(過去の) 既定の事実について使えるか否か〉

この素因についてマイナスなのは、(シ)ソウダとマイ。その他はプラス。

[4] 〈現在・未来事について使えるか否か〉

本稿の形式はすべてこの素因についてプラスである。

(つまり、素因 [2] と、[3] [4] は、すでに階層的上下関係になく、十字的交差の関係にある。

次に、[2] で小分けされた「推量」の内分けについて考えてみよう。

これらの推量の表現を見比べてみると、同じく推量といっても、(3)～(6)が、単に自分の主観を述べる言い方であるのに対し、(7)～(11)が、何らかの客観的な根拠があっての推量であるという点に違いがあることが見られる。前者を主観的推量、後者を客観的推量といっても間違いではないと思われるが、主観的・客観的という用語は、でも触れたように誤解を伴いやすいのでここでは避ける。「主観」を、「対象に向っての自我の知覚、思惟、意識、感動」というふうにとれば、ここでいう「推量」も「主観」以外の何ものでもない。ただ、ダロウ、カモシレナイ、ニチガイナイ、マイなどの推量が、もっぱら自分の知識とか過去の経験から推しはかってのものであって、(降リ)ソウダ、ヨウダ、ラシイのように、自分の外に何らかの根拠が客観的に存在することを相手に分からせようという意図は含んでいない、という点からいうならば、これらの方が「より主観的」ということはいえるだろう。ここではダロウ、マイ、カモシレナイ、ニチガイナイのような推量の表現を、かりに「単純な推量」と呼んでおく。前節にも紹介したように、金田一氏は、ダロウ、マイだけを「活用形をもたない」ということから「主観的」表現とし、(シ)ウダ、ヨウダ、ラシイを「客観的表現」だとされた。「活用形」をもたないという基準からいえば、上に見たように伝聞のソウダも同じような性質をもつので問題になるし、また、氏が、ラシイを客観的表現であるとする根拠の一つとして、芥川龍之介の短篇から四つのパラグラフを挙げ、ラシイが「話者以外の人の推量を表わしている例は」「いくらでも集めることができる」と主張しておられるのには必ずしも納得できない(小説の地の文で作者が登場人物の気持になりかわって主観的表現をすることは常のことで、その点はダロウも例外ではないと思う)けれども、ダロウ、マイが、動詞の命令形や終助詞に近く、話し手の発話時の気持をもっぱら表わすものという点で、推量の助動詞のうち最も主観的なものだという点は確かだと思う。終助詞に近いというのは、ダロウには、

(20)　「あんたいま煙草を拾ったでしょう。この方のだから返してあげなさいよ」

のように、相手に何らかの反応的行為を求めるような働らき、前節で「対人的ムード」の一つと考えたようなムードを担う場合があることにも現れている。

ダロウ、マイが、話し手がもっぱら自分ひとりの知識、過去の経験を支えとしての推量であることを示そうとする表現であることは、「推量」とはいいながら、しばしば実は積極的な主張である表現に使われることにもつながる。

(21) 土地の値上がりをそのままにして、金は貸すから自分で家を手に入れろというような政策が続く限り、マイホーム借金の重荷はむしろ増すばかりだろう。(「天声人語」)

ダロウ、デアロウ、マイは、このように、新聞などの論説、「読者の声」の類、学術論文に頻繁に使われる。このようなダロウの用法は、しかし、推量とか概言的報道とかの中に入れてよいかは疑わしい。むしろ「主張」のムードの一形と考えるべきかもしれない。マイにも、否定的意志を表わす、推量とは違った使い方がある。

カモシレナイ、ニチガイナイについては、ここではダロウのバリエイションというにとどめる。ただ、ニチガイナイが、実際には、話し手の独白に使われるのが一番多いことは注意しておいてよいだろう。

以上のことから、推量の表現を下位分類する素因として、次の点があることがいえる。

[5] 〈「単純な」推量か、客観的な根拠を拠りどころとしての推量か〉

前者なら、ダロウ、マイ、カモシレナイ、ニチガイナイ、などとなる。

後者なら、(シ)ソウダ、ヨウダ、ラシイとなる。

次は、(シ)ソウダ、ヨウダ、ラシイの使い分けの素因について考える番である。

これまでの場合と違い、これらの使い分けに関与する要因はなかなか複雑である。多くの文法書には、ヨウダもラシイも、「客観的な根拠があって推量する」とか、「...と推定される状態にある」とか説明されるが、ある文脈・状況においてはこの三者が入れ替え可能なように見え、また他の文脈・状況においてはそのうちの一つあるいは二つは可能だが他は不可能というような事実を説明し得るに至っているとは思えない。これらの語が多くの場合、ある状況に対してほぼ同じように対応できることは事実だから、これらの使い分けの要因は、これまでのように、上位から下位への階層的、枝分かれ的分類では処理できないことは明らかだ。また、これまでのように、「A か 逆 A か」というバイナリな仕分けではどうしても処理できず、「A の特性をどの位持っているか」という、程度的な仕分けも必要になってくると思われる。

こういう場合は、できるだけ入れ替えが明らかに不可能な場合から手をつけていくのが得策である。で、まず、「(シ) ソウダ」が使われる場合のうち、「ヨウダ」「ラシイ」で置きかえることができない場合を具体的に考えてみよう。

先ず思いつくのは、たとえば棚に箱か何かがのっていて、それが半分近く棚から外にはみ出しているとか、老朽化した家の柱も壁も横に傾いているとかいった状況を見て、

(22)　ア、箱ガ落チソウダヨ。
(23)　アノ家ハ今ニモ倒レソウダ。

というような場合である。これらは、多くの文法書にあるように、「客観的な状況からそのように思われる」というのにあてはまる状況だから、ヨウダ、ラシイも使えそうであるが、次のような表現は、いずれも明らかにおかしいと判定されるだろう。

(24)　箱ガ落チルヨウダヨ。
(25)　アノ家ハ今ニモ倒レルヨウダ。

このことから、〈「箱が落ちる」「家が倒れる」という事実は未だ実現していないが、現在眼前にある状況からそのことが予想されるということを表わす〉には(シ)ソウダが使われ、ヨウダ、ラシイは使われない、ということがいえそうだ。渡辺(1964)にも、「(シ)ソウダ」は「今まさに実現しようとする事件をあらわす」というよう特徴づけがなされている。また吉田(1970)には、ヨウダもソウダも「どちらもまだ現実には存在しないのであるが、「ようだ」は、その非現実を読者の心内に既にあるものとして推定し、「そうだ」はこれからあろうとするものとして想定する」と説明している。「(シ)ソウダ」の用法がこれだけでないことは後にも見るとおりだが、ある状況を、ある事の起こる徴候であると見立て、そのことがまさに起る可能性があると述べるのが(シ)ソウダの中心的な役割であるということはまちがいなようだ。

しかし、同じような例ながら、

(26)　雨ガ降リソウダ。(=(3))

という発話の出る同じ状況において、

(27)　雨ガ降ルヨウダ。
(28)　雨ガ降ルラシイ。

が、全く言えないと言い切れるかというと、多くの日本人は躊らいを感じるようである。先の(24)(25)が明らかに不適切と判定されるのに、この(27)(28)はそれほどでもないと思われるのはなぜだろうか。

金田一(1953)は、先にも触れたように、上の三語をいずれも「...と推定される状態にある(または属性を有する)」という点で同じであると考えるが、「もっとも、意味は多少ずれている」とし、(注)で次の三つの文を例にして次のよ

うに説明している。(ⓐ ⓑ ⓒ はここで仮につけた)

ⓐ 雨が降っているそうだ。
ⓑ 雨が降っているらしい。
ⓒ 雨が降っているようだ。

ⓐ は、「外の様子は全然知らないが、先刻自分が外から入って来た時に雨が降っていた。そんなことから、まだ降っているだろう、と推量される、そういう事態に用いる」; ⓑ は、「窓から外を見ると、外を行く人がみな傘をさしている。それを見て、あれは雨が降っているんだ、と推量する。そういう事態に用いる」; ⓒ は、「ガラスの窓越しに見ると、霧雨だと見えて雨の実体ははっきり見えないが、向うの家の黒い塀のあたりを見ると、どうやら細かい雨の糸が見えるような気がする。そういう事態に用いる。」

この判定はかなり微妙で、私が訊いた多くの日本人は、ⓑ と ⓒ の説明で想定される事態では、ⓑ も ⓒ も可能だという反応を示し、ⓐ については納得がむずかしいようだった。ただし、金田一氏が、一般的な三者の差違の説明に、「事態が、推量される事実に対してもつ力」の大小という考え方を導入し、それを ⓒ>ⓑ>ⓐ とされている点は興味深い。その力がヨウダではラシイより強いというのは、この後で述べる推量判断に対する主体性の強弱と共通するところがあるように思われる。ただ、(シ)ソウダにおいて、その力が一番弱いとされるのは、降ッテイルという状態性の動詞についた場合を考えられたからで、「降リソウダ」「倒レソウダ」のような形では当らず、むしろ反対に強いのではないかと思われるがどうだろうか。

(シ)ソウダの少なくとも一番大きな働きが、〈眼前の状況から、あることが今にも起こる可能性があると予想する〉ということを表現することであろうと思われるのは、それが、新聞の天気予報とか、政治・経済状勢の「雲行き」を報ずる類の記事に典型的に現れることからもわかる。出来事・動作の動詞につく場合が多いが、状態動詞や形容詞につく例も少なくない。

(16) 相変わらずの夏型できょうも厳しい暑さが続きそうだ。
(17) アムール河方面に低気圧が現れて東進しており、きょうは北日本一帯は天気が下り坂。早ければ今夜から雨が降り始めるところもありそうだ。
(18) 気圧の谷が近づき、九州地方から天気がくずれるが、その他の地方の天気はまだよさそう。
(19) 来春の新規学卒者の就職戦線は、採用数を増やす企業が多く、前年に比べかなり明るくなりそうだ。

(20)　今後も予想される三大党派の内ゲバをはじめ、党派の分裂状態、硬直性、宗派的性格は、なかなか変わりそうにない。

上の例の(シ)ソウダのところは、ラシイでは(後に考えるような理由から)置きかえることはできないが、ヨウダは使えないことはないと思われる。しかし、上の文脈で(シ)ソウダとヨウダを比べてみると、(シ)ソウダには「予想」それも「近い未来」についての予想という感じが強い。(シ)ソウダもヨウダもラシイも、[5]についてはプラス、つまり「客観的な状況から推量する」という点は同じだが、この、近い未来についての予想を告げる表現という点が、(シ)ソウダを他の二者から区別する要因の少なくとも一つといってよさそうだ。ただ、より厳密にいうと、

(21)　アイツナラヤリソウナコトダ。

のように、別に「眼前の状況から」予想しているわけでない場合もあるし、また、

(22)　モウソロソロ彼ガヤッテ来ソウダ。

のように、単に「予感がする」というだけの表現であるようなこともある。が、ここではこれらは一応、予想の延長、ないし特殊な場合と見ておくことにする。以上の観察から、

[6]〈眼前の状況から近い未来の予想を告げる〉

ということが、推量の助動詞の使い分けの一つの要因であると考える。(シ)ソウダはこれについてプラス、その他はマイナスということになる。

(シ)ソウダの用法がこれに尽きるといえないことは既に述べたが、この形のその他の用法では、ヨウダ、ラシイとの違いはまた違った観点が必要になる。まず考えられるのは、

(23)　コノ西瓜ハオイシソウダ。
(24)　元気ソウデスネ。
(25)　忙シソウダカラ出直シテ来ルヨ。

などのように、形容詞や形容動詞に付いた場合だ。これらを「未来についての予想」というのは、「予想」という語の意味をひろげ過ぎだろう。これらは、対象の状態を見て、ある印象を述べているに過ぎない。(シ)ソウダが多くの文法書で「様態」を表わすものといわれているのは、ソウダのこのような使われ方に着目してのことであろう。では、こういう文脈で、ソウダは、ヨウダ、ラシイとどう違うだろうか。

(26)　コノ西瓜ハオイシイヨウダ。

(27) 元気ナヨウデスネ。
(28) 忙シイヨウダカラ出直シテ来ルヨ。
(29) コノ西瓜ハオイシイラシイ。
(30) 元気ラシイデスネ。
(31) 忙シイラシイカラ出直シテ来ルヨ。

こうして三者を並べてみると、ラシイは、それぞれの事柄を推量するのは、自分の眼で見た印象もいくぶんかはあるにしても、だれか他の人からの情報によってそう推量するという感じが強いという点で前二者とまた区別されるようだ。この点については次の段で考えることにして、ここでは (23) (24) (25) と、それぞれそれに対応する (26) (27) (28) の違いについて考えてみよう。

これもかなり微妙ではあるが、上で見る限り、(シ)ソウダは、当の対象 (西瓜とか相手の人とか) 自体の状態だけから推量して言うのに対し、ヨウダは、対象だけでなくそれを含む周囲の状況から受ける印象から推量する、いいかえれば、ソウダでは対象だけが、ヨウダではそれを包む周囲の情景も話し手の視界に入っている、というような違いがあるように思う。また、(シ)ソウダのほうは眼で見たままを言うという点で直感的な推量であるのに対して、ヨウダのほうは、何らかの思考を経た推量であるというようにも言えるかと思う。おそらく上の二つの事はつながったものだろう。なお実際の使用例をもっと調査する必要があるが、一応上のことも要件の一つとして書き留めておこう。

[7] 〈直感的推量か、思考を経た推量か〉

以上では(シ)ソウダにやや重点を置いた観察をしてきたが、今度は、ヨウダに焦点を移してみよう。これまでに見たところから、ヨウダは、「客観的な根拠があっての推量」であり、その推量は対象だけでなく、それを包む状況からの思考的な推量であるという特徴をもつことが分かったが、ヨウダの実際の使われ方としては、ある状況から受ける印象をもとに、話し手が物事の「一般的傾向」を推しはかるようなときに際立って多いことが注目される。

(32) 先週はまた暴走族が各地で騒いでいた。気温二六度以上、湿度八〇%以上になると本能的、衝動的に行動する人が多くなるようだ。(朝日新聞「きょうの天気」)
(33) この [「青少年の性に関する価値意識調査」の] 結果について、大阪大学人間科学部の沢田昭助教授は「米国の同種の調査では、女性の『女』志望は八四%という数字がある。日米の差はあまりに大きく、日本はまだまだ男性優位の社会で、女性が女性として生きていくことの難しさが反映されているようだ」と説明している。(朝日新聞)

(34)「なかなか旨かった。それはそうと、見ていると、みんながこういう手つきをして、魚を下にして一ぺんに口へ抛り込むが、あれが通なのかい」
「まあ、鮪はたいがいああして食うようだ」(志賀直哉「小僧の神様」)

上の例のヨウダのところは(シ)ソウダでは置きかえられないが、ラシイは可能であろう。もっとも、(33)ではかなりおかしく、(34)ではややおかしい程度、(32)ではおかしいとは言えないだろう。しかし、ここでラシイの適切性に問題があるのは、後で考える理由によるので、「一般的傾向」を表わすことができないからではないと考えられる。もっとも、ヨウダの方がぴったりするということは確かだろう。ここではたらく意識はやはり要因の一つとして挙げておくべきだと考える。

[8] 知り得た状況から、一般的傾向を推量する。

今まで見てきたことのほかに、(シ)ソウダ、ヨウダ、ラシイを使い分ける要因として、無視することができないのは、その推量の根拠となる状況についての情報源が、話し手自身の観察によって得られたものか、それともどこかほかから得られたものか、という区別である。このことは、先に推量から外して「伝聞」とした(スル/シタ)ソウダも含めての問題となる。

用言の現在形、過去形につづくソウダ(以下単にソウダと書き、動詞の連用形および形容詞の語幹につづくソウダをこれまで同様(シ)ソウダと書いて区別する)が、「伝聞」という呼び名のとおり、他から伝え聞いたことを相手に告げる、というのがその本来の特性であることは今更いうまでもない。が、「他から伝え聞いたことを伝える」用法は、ラシイにも、また僅かながら、ヨウダにも見られるものである。それは、典型的にはソウダの前触れ的表現である「～ニヨルト」やそれに類する表現が、大ていの場合ラシイと共にも使えることで分かる。

(35) 科学者の見解では、[この新しいすい星の]遠日点が木星の軌道近くにあるらしい。(朝日新聞)

上の例でもそうだが、「～ニヨルト」の類の表現の後ではヨウダは多少とも不自然である。しかし、ヨウダにも、次のような例がある。

(36) 先にまとまった東海地震の防災基本計画によると、地震が予知されて警戒宣言が発せられた場合、新幹線も高速道路も全面ストップとなるようだ。(朝日新聞)

(37) 井戸原が調査したところによれば、志波は東邦土建の赤字に苦しんで政活資金をよけいに窮迫されている。一日でも早く手放したいのが本音だが、持前の強気で何とか我慢している状態のようだった。(松本清張「棲息分布」)

(シ)ソウダに「他から得た情報による推測」という要素がないことは明瞭である。ソウダの場合は、百パーセント他から得た情報だ。ラシイとヨウダは、自分の観察からの推測でもあり得るし、他から得た情報に基づく推測である可能性もある。その意味でこの二者はともに曖昧だが、ラシイは、どちらかというと他から得た情報に基づく感じの比重が自分の観測による推量という要素より大きく、ヨウダではその比率が逆だと言えると思う。ここではどうしても「程度」の違いとして、たとえば次のように数量的に表わすほかないと思われる。すなわち、

[9] 〈推量の根拠となる情報は、自分自身の観察によって得たものか、それとも他から手に入れたものか〉

ということが、これらの語の使い分けに際して働く要因であるということになる。そして、その要因の相対的程度は次のように表わすことができる。

	(シ)ソウダ	ヨウダ	ラシイ	ソウダ
自分の観察による	3	2	1	0
他から得た情報による	0	1	2	3

論説的な文章では、まず、ソウダ、ラシイで他から得た(それ故より客観的ともいえる)情報をもとにある概況を述べ、次にヨウダ、ダロウなどでそれに対する自分の考えを展開するというという例がしばしば見られるが、これも上のように理解するとよく理に叶ったことだと思われる。表現論、ないし文章論は本稿の範囲の外にあるが、この語法の実例として二例だけを挙げておく。

(38) 紙不足の深刻さは、一時的なものではないらしい。悪い材料がそろいすぎているようだ。経済が拡大すれば、紙の消費者はますます増える。しかも...(「天声人語」1973.10)

(39) ...また、修学旅行に出た団体旅行で、学生が旅館や駅の売店等で、些細な物ではあるが「ぬすむ」ことに対して、あまり心理的抵抗がないらしいことも、「他人の独占排他的な所有権」という意識が一般普遍的には確立していないことの現われであるように思われる。(川島武宜「日本人の法意識」)

以上見てきた限りでは、ヨウダとラシイは(「比況」のヨウダ、「ふさわしい」意味のラシイは別)、大方の文法書にも書かれているように、互いに入れ替え

ることが常に可能ということになる。事実、これまでに見た例でも両者入れ替え可能な場合のほうが多い。しかし、さらにいろいろな種類の文についてあたってみると、ラシイとなっているところをヨウダにかえると明らかにおかしく、また逆にヨウダとなっているのをラシイといいかえてみるとどうにも納まらないという例が案外多いのに気がつく。

たとえば先の(33)の例だ。これは新聞記事だが、ある調査、つまり資料としての事実についてその筋の専門家が、前述のように、一般的傾向について推測を加えている文である。「女性が女性として生きていくことの難しさが反映されている。」と確言するほどの確信を彼はもっていない、しかし専門家としてその事実がどういう傾向を示しているのか、その事実の底にどういう現代日本社会の特徴が横たわっているのかについての見解が求められているからには、確言はできないまでも概ねこうであるという見とおしを述べねばならない立場にある(→[2])、その見とおしについての客観的な資料は提供されている(→[5])、求められている情報は「一般的傾向」いいかえるとジェネラリゼイションである(→[8])、とざっとこのような素因の複合で、ヨウダとラシイという形式のどちらかが選ばれるところまで来たわけである。

さて、ここでヨウダが、現に選ばれているように自然で、もしラシイといいかえてみるとおかしいと感じられるだろうということは既に述べたが、その「おかしい」ということの中味は何だろうか。何人かの日本人の印象を綜合してみると、ここをラシイというと、専門家として見解を求められている者が、いかにも責任を逃れようとする口ぶりに聞える、自信のない言い方に感じられる、ということのようだ。先に[9]のところで考えたように、客観的事態を拠りどころにして推測する、ほとんど客観的事態の描写というに近い表現が(シ)ソウダであり、ただ他から得た情報をそのまま相手に伝える(つまり推測、予想は全くその情報の受けとり手にゆだねる)のが伝聞のソウダであり、ヨウダとラシイはその中間にある。ラシイといえば、聞き手の側では、その話し手の推量がみずからの判断によるよりも他から得た情報に基づくものである可能性のほうが高いという印象を受けるのに対し、ヨウダではその逆の印象があるという違いがあるというのであった。聞き手の方の印象に、同じく曖昧ながらこのような微妙な差があるということは、話し手の方でそのように印象づけようという意識が、この両語の使い分けのファクターとしてはたらくということでもある。先の(33)に加えて、もうすこし具体例でこのことを確かめてみよう。

たとえばここに、新聞の「異色企業」探訪記事がある。特派記者が焼酎ブー

ムに乗るS酒造を訪ねる。工場内の模様、急激な成長の原因などが、記者の観察、関係者の談話などを交えて記された後、今後の見とおしについて、それが必ずしも楽観が許されない事態にあることを述べ、

(40) 今後はそうした職人難からこれまでのような業績拡大に足を引っぱられる恐れはあるようだ。

と結んでいる。このことによって、読者は、この見とおしが単に関係者の話をそのまま伝えたのではなく、記者が現状を自ら分析して主体的に見とおしを述べたものだという印象を受ける。ラシイと結んで「いけない」わけではないが、ラシイとすれば、主体的な判断という印象が薄れ、記事が“弱く”なる。ヨウダとラシイの区別というのは、つきつめていくと、このように話し手が主体的に責任をもって物を言っているのかそういう印象を避けようとしているのかといった意味での「話し手の主体的態度」の反映だということになる。

(41) 「お大師さんの痕跡ですか」...(中略)
痕跡といえば『理趣経』ぐらいのものでしょうか、という私の問いに対し、[清水公照氏は] しばらく考えておられたが、やがて、
「いや、ずいぶんあるようです」
と、いわれた。(中略)
東大寺にはいま十六の塔頭寺院が付属している。[空海の建てた] 真言院はその中の一つとして存在しているのだが、清水氏は、門なども他の塔頭より重々しいようです、という。(司馬遼太郎「空海の風景」)

かりに上のヨウデスの部分をブランクにして、日本人に、ヨウデス、ラシイデスのどちらかを入れてくれといえば、おそらくヨウデスを入れる人が圧倒的に多いだろうと思われる。ここでもまた、その人の主体的な判断が求められている場合に、その人が、たとえ断言でなく概言にせよ、ラシイと、「よそごとのように」言うはずがない、という判断がそこにある。これをこの節の素因の最後のものとしてあげるまえに、少し長いが、この使いわけの微妙さが出ていて興味深いと思われる次の一例を加えておきたい。

(41) 正午前から改進党のN理事が日米行政協定や「吉田書簡」についてS外務省条約局長に質問をしていた。まだ暑いころで冷房施設がなく、委員室のドアは開けっ放し。廊下を小走りに駆けて行く衛視の声が耳に入った。解散らしいぞ」とね。
N委員長の隣に座っていた私は一瞬耳を疑った。とにかく確認しなければならないので委員長に「解散になったようです。ちょっと休憩してください。確かめて来ます」と耳打ちした。委員長は「それは大変だ」といって「休憩いたします」とやった。

熱弁をふるっていたN理事は「わが輩が質問中にいきなり休憩とは何事だ」とどなる。委員長が「どうも解散したらしいので」というや委員たちは総立ち。騒然とした中で「N君、怒ってもしようがないよ。もう代議士じゃなくなったんだから」という声も聞いた。(朝日新聞 荒尾正浩の「抜き打ち解散」の想い出)

以上、ヨウダとラシイの使い分けにどういう要因がはたらくかを見てきた。このことをまとめると次のような表現になるだろう。

[10] 〈話し手が、主体的に推量判断をくだし、その判断に自ら責任をもつという意識があるか否か〉

この素因についてプラスであればヨウダ、マイナスであればラシイが選ばれる。

その他の推量判断については、既にこれまでに記した要因以上に、この素因を考慮する必要はない、というふうに考える。次の一覧表のブランクのところはすべてその意味である。

概言的報道の表現を確言のそれから区別するところから始めて、次第に細かい要因にすすみ、上に至った。このうち、[1] [2] [5] は階層的(ハイアラーキー的)関係にあるが、その他は並列的に存在しているものと考えられる。次節で簡単にこの節で並べた要因をまとめ、その性質を考えることにしよう。

3. ま　と　め

本稿で観察の対象としたムードの助動詞の使い分けの素因をまとめて表にすると次のようになる。

本稿では、はじめ、上のような素因を、たとえば塚原鉄雄(1957)に見られるような、古代語の推量の助動詞の使い分けの説明としてあげられている、「事実、非事実」「確定・非定」、「将/未/不/反」事実といった要因と比較もしてみたかったのだが、それには、紙面だけでなくなお相当の勉強が必要と思われるので今回は控える。ただ、現代語の概言的表現について見る限り、上の古代語の分析に使われている、推量の対象となる事実の性質ということだけでは説明しきれないだろうということを指摘するにとどめよう。

[1] から [10] までは、なお粗い概念化である。しかしこれを今後修正、厳密化するとしても、ここで考えたように、話し手の主体的態度、相手に与える効果を意識しての使い分けの心理は、どうしてもこの種の語の使い分けに関して

	確言形	ダロウ	カモシレナイ	マイ	(シ)ソウダ	ヨウダ	ラシイ	ソウダ	ワケダ	ノダ
報道か否か	+	+	+	+	+	+	+	+	−	−
[1] 直接経験した事実の報道か	+	−	−	−	−	−	−	−		
[2] 自分の推量をまじえた報道か	−	+	+	+	+	+	+	−		
[3] 既定の事実についての報道か		+	+	−	−	+	+	+		
[4] 未定の事(現在・未来)についてか		+	+	+	+	+	+	+		
[5] 客観的な根拠による推量か		−	−	−	+	+	+			
[6] 眼前の事実だけからの予想か		−	−	−	+	−	−			
[7] 思考を経た推量か		+	+	+	−	+	+			
[8] 限られた現象から一般的傾向を推量する		−	−	−	−	+	+			
[9] 概言の拠りどころの比重										
自分の観察					3	2	1	0		
他から得た情報					0	1	2	3		
[10] 推量判断に自分が責任をとる意識						+	−			
(それ自体が) 否定になるか	+	−	−	−	+	−	−	−	+	+
過去になるか	+	−	+	−	+	+	+	−	+	+
疑問文になるか	+	+	+	−	+	+	+	−	+	+

言及せずにはすませないものであろうと考える。

ある文がネイティヴスピーカーによって「おかしい」と感じられるときの、その「おかしさ」の中味については、まだまだ研究されるべきことが多い。チョムスキーは、'grammatical' ということを 'acceptable', 'meaningful' と区別し、さらにその中に程度の差があることを変形文法提唱の当初から問題にした。今日変形文法家といわれる人たちの間では、上の三つの概念がそのように区別して使われてはいないようである。久野暲氏は、'談話法' 違反のために「不自然」になった文を「不適格 (unacceptable)」とし、'構文法' 違反の「非文法的」と区別している(久野(1978))が、「談話法制約も文法の一部であるから、「非文法的」と呼んでよい筈であるが」と書き添えておられるところからも、この点が「文法的」とは何かという根本的な問題でなお論議すべき点のあることが暗示されている。私は、かねてから「おかしい」という判定がその部分を含む「文」だけで判定できる場合を「正しい・正しくない」('gram-

matical') の問題とし、その文の置かれている文脈、あるいは状況に照らしてはじめて判定できる場合を「適切さ」('appropriate') の問題とし、さらに「日本語らしい・らしくない」を「自然さ」の問題とし、チョムスキーの 'unacceptable' (容認不能) はそのまま残してはどうかと考えてきたのであるが (たとえば寺村 (1968))、特に二番目の「適切さ」に関しては、なお考え進まなくてはならないと思っている。本稿では、概況報道の諸表現について、その使い分けの要因と思われるものを考えたが、このような、話し手の主体的態度、現象に対する心理、聞き手に対する気づかいないし思わく、などが「語法」にからむのは、その他のムード的表現にも通じて見られるもので、「おかしい・おかしくない」というとき、日本語ではとくに、語法論議がいつの間にか話し手の態度を云々している、といったようなことになっている場合が多い。概況、とくに推量に接したものに「説明」の表現 (ムード) があるが、次回はそこに焦点を当て、ムードという文成分の性格をさぐっていきたいと思っている。

引用文献

岡村和江「近代作家の文体と展望」(『講座現代語』第5巻) 明治書院、1963

風間力三「「死にそうだ」と「死ぬようだ」(『口語文法講座3』) 明治書院、1964

Kajita, Masaru, A Generative-Transformational Study of Semi-Auxiliaries in Present-day American English, 三省堂, 1967

金田一春彦「不変化助動詞の本質」(『国語国文』22-2, 3) 1953

久野暲『談話の文法』、大修館、1978

国立国語研究所報告3『現代国の助詞・助動詞——用法と実例』(永野賢) 1951

此島正年『国語助動詞の研究』桜楓社、1973

沢田治美「日英語主観的助動詞の構文論的考察」(『言語研究』68号) 1975

塚原鉄雄「推量の助動詞」(『国語国文』26-8) 1957

寺村秀夫「ムードの形式と否定」(『英語と日本語と』) くろしお出版、1979

中右実「モダリティと命題」(『英語と日本語と』) くろしお出版、1979

芳賀綏「"陳述"とは何もの?」(『国語国文』23-4) 1954

松村明・編『古典語現代語・助詞助動詞評語』学燈社、1969

吉田金彦『現代語助動詞の史的研究』明治書院、1971

Lyons, John, *Semantics:* 2, Cambridge University Press, 1977

渡辺実「よさそうだ・なさそうだ」(『口語文法講座3』) 明治書院、1964

〃　『国語構文論』塙書房、1971